

平成 18 年度国際交流委員会 JACET 代表者、および招待講演者

4 月 IATEFL (April 8-12) 村田久美子 (早稲田大学)
RELC (April 18-20) 神保尚武 (他 3 名)(早稲田大学)
鈴木広子 (他 1 名)(東海大学)

6 月 KATE (June 23-24) 堀部秀雄 (広島修道大学)

9 月 JACET 全国大会招待講演者
IATEFL (Wendy Arnold)
RELC (Greame Cane)
KATE (Jeong-ryeol Kim)
ALAK (Seongwon Lee)
ETC-ROC (Leung, Yiu-nam)
(Cheung, Kai-chong)

10 月 ALAK (October 27-28) 募集中

JACET 代表、報告書

1 . IATEFL

40th IATEFL International Annual Conference 及び Associates' Day 報告

報告者：村田久美子（国際交流委員会、IATEFL 担当、早稲田大学）

期間：4月8日 4月12日

Associates' Dinner 4月7日 Associates' Day 4月8日

Pre-Conference Events 4月8日 Conference 4月9 - 12日

場所：Harrogate International Conference Centre, Harrogate, North Yorkshire, UK

参加者数： Associates' Day：約80の世界各地の Associates より、約50名

及び、IATEFL 本部役員

Conference: 約1000名

Associates' Dinner：

Associates の集まりは恒例により、前日夕方(7日)より、Harrogate の The Yorkshire Hotel での Associates, 本部役員、それから今回は大会 volunteers を含めた dinner で開始、翌8日の Associates' Day に向けて、Associates 同士と IATEFL 本部役員, volunteers の自己紹介、顔合わせを行い、和やかな雰囲気の中で、進められた。

Associates' Day

8日は朝9時より夕方の5時まで、今年度の総会まで Associates' Coordinator を務めた IATEFL Hungary 代表の Margit Szesztay と今年度から新たに Coordinator となる IATEFL Greece 代表の Sara Hannam を中心に、約50名の Associates と会長 Tessa Woodward, 今年度総会で Peter Grundy 氏を引き継ぎ新副会長となった Marion Williams(IATEFL のシステムで Williams 氏は来年度の大会での総会以降、会長となり、Woodward 氏が副会長となる。つまり、同一人物が、まず副会長を1年務めたあと、会長を2年、その後また副会長を1年務めた後、退任となり、引継ぎをスムーズにしている。) 及びその他の IATEFL 役員を加え、活発な意見交換が行われた。

今年度は特に、IATEFL の14の SIG と各 Associates、また、Associates 間での研究協力をいかに進めていくかの討論が、これまでの協力の具体例を挙げながら熱心になされた。これについては、また後ほども述べるが、海外提携学会といかに研究協力関係を進めていくかという観点から、JACET でも研究協力の可能性を秘めた事項であるように思えた。

その他、昨年度から試みている会員がアクセスできる Electronic Articles Bank をいかに維持していくかなどが話し合われた。これに関しては、各 Associates が年に2点ずつ記事を投稿するということが確認された。各 Associates の会員のアイデアをより多くの会員

で共有できるようにという考えである。現時点でも Associates' の website に実践的なアイデア等を扱った小論文が掲載されており、download も可能なのでご参考にされたい。現在ではまだ 6 点ほどしか投稿されておらず、継続にあたって各 Associate の協力が要請された。この件に関しては、新 Coordinator の Hannam Sara より、最近直接 JACET にも要請があったので、近日中にまた改めて会員の皆様をお願いさせて頂きたいと考えている。

その他、WMS(Wider Membership Scheme)の充実、地域の Associates 間の協力関係の促進などについて話し合いが行われた。また、Associates の運営発展に関するハンドブックが *Developing an Association for Language Teachers* の題目のもとで改訂出版されたことが紹介された。この改訂版も IATEFL の web より download 可能である。

最後に、Associates' Day の詳細なレポートについては、IATEFL の web の Associates の欄に minutes として掲載されているのでご参照頂ければ幸いである。

Conference :

Pre-Conference Events (PCEs) :

Associates' Day が開かれた同日、8 日には一日、IATEFL の 7 つの SIG による PCEs が開かれた。Associates' Day の会議の為、出席はできなかったが、JACET の大会には行われていない Events なので、今後の参考の為に報告したい。PCE としての SIG 等による workshop は TESOL 大会等でも実施されており、各分野での会員の Teacher Development の役割を果たしている。SIG の活動を活性化したり、研究の推進等を考えると、開催日程等の検討事項もあるが、今後 JACET でも検討されてもいい課題かもしれない。また、Associates' Day の報告でも述べたが、IATEFL の Associates 間の協力を考えるにあたり、各 Associates 間の SIG の協力という可能性を検討するのも、研究交流を進めるという観点から有意義であると思われる。

Plenary talks 及び symposia 等:

昨年度は、会場が 2 箇所に分かれ、2 つの plenary speech が同時開催され、選ばざるを得ないという状況だったが、今回は本当の意味での Plenary talk になり、最終日の 12 日を除き、朝一番に plenary がひとつ入るという方法に変更された。スピーカーは Michael Swan, Jennifer Coates, Ryuko Kubota, Bena Gul Peker と女性の方が多く、また、文化・言語的にもいわゆる 'native speakers' に限らず、4 人のうちの 2 人の基調講演者は、日本人で現在アメリカの大学で教鞭をとりながら活躍している久保田竜子さんとトルコの大学で教鞭をとっている Bena Gul Peker さんというように 'non-native speaker' であり、最近の TEFL, TESOL の傾向や PC をかなり意識した選考といえよう。

初日の講演者 Michael Swan は input、output 双方において、extensive, intensive (concentrated), これに加えて analysed の 3 要素がいかに大切であるかを、特に斬新な主張とは言えないまでも、巧妙な話術でわかりやすくまとめた。また、Jennifer Coates は

gender が日々の会話の相互作用の中でいかに構築されるかを、今回は humor に視点をあて、実例を挙げつつ、女性も会話において joke を使用するがその種類が男性と違うことを質的分析結果を中心に humorous に説明した。男女の会話のステレオタイプ化を否定しつつも、同時に、パターンの違いを紹介することにより、別のステレオタイプ化に繋がらないとも限らない結果の紹介で、データに基づいたものとはいえ、この種の調査結果の紹介の難しさを感じた。Ryuko Kubota は言語教育で文化をどのように考えていくかという点について、essentialism に陥らず、多様性に対応できる、ダイナミックなモデルの構築の可能性について説得力のある講演をした。以下に Conference での基調講演者名とタイトルを挙げる。

4月9日 Michael Swan 'The input to language learning: two out of three ain't good enough'

4月10日 Jennifer Coats, 'Having a laugh: gender and humour in everyday talk'

4月11日 Ryuko Kubota, 'Critical approaches to culture in English language teaching'

4月12日 Bena Gul Peker: 'The spirit of the dance: taking one step further'

本年度の大会でのトピックの特徴としては、Michael Swan の基調講演に始まり、grammar や IT が出版社や新聞社による特別シンポジウムや Event でも大きく取り上げられていた。大会1日目の9日に行われた ELT Journal 主催による ELTJ Debate でも Michael Swan や Scott Thornbury をパネリストに招き、'Sorry, but you've got to have a grammar syllabus' の題目のもと、文法に基づいたシラバスの是非が討論された。討論の内容については、20年ほど前にも盛んに同じような内容の討論が行われていた様な気がし、出版社の主宰ということで、出版物の出版の関係もあったかと思われる。また、11日には Cambridge University Press による forum が 'ELT in the digital age - where is technology taking us?' のもとで IT の可能性、問題点を扱い、また、同じく11日に *The Guardian Weekly* も 'Meet the Learner of the Future' というタイトルのもとで最近のテクノロジーと ELT の可能性、問題点についてのパネルを組んでいた。昨年シンポジウム等で大きく取りあげられていた CLIL (Content and Language Integrated Learning) や CEF (Common European Framework) については Pre-Conference Events の中で、SIG の活動と結びつけて取り上げられていたり(CEF は Testing, Evaluation & Assessment で、CLIL は Young Learners SIG で 'Young Learners and the CLIL continuum' という題のもとで取り上げられていた)、また一般発表の中でも、この2つのトピックに関連したものが多く見られた。

最終日の12日午前中は昨年度と同じく、テーマ別のシンポジウムがいくつか開催されたが、昨年度は初めての試みで同時間帯に15のシンポジウムのみが開催され、参加者は登録時に希望のシンポジウムを明示しておくというシステムを採っていたが、今年度はシ

シンポジウムの数は8となり、同時時間帯には一般の発表も入っており、同時展開のシンポジウムのみという試みはなくなった。また、昨年は初日の基調講演の後、全ての発表がインタラクティブの多い workshop でスタートしたがこの試みも今回は取り入れられていなかった。

その他：

出版社等の協賛：

Conference の内容でも述べたが、今回も出版社が大掛かりなシンポジウムやフォーラムを援助して開催しているケースが(個人の著者による発表のみではなく)目だった。また、The British Council が David Graddol のもとに、今年2月に出版した *English Next* を著者出席のもとに大きく取り上げ、話題を呼んでいた。

研究協力などの可能性：

会議の説明の中でも述べたが、今回 Associates' Day の中で、IATEFL SIG と Associates の各 SIG との研究の可能性が検討された。既に、活発に協力して workshop や conference を開催している IATEFL SIG と Associates もあり、また、SIG と各 Associates 間の SIG の協力の可能性も論じられ、JACET でも pre-convention event として joint SIG による workshop や symposium などの可能性も考えられるのではないかと思った。

最後に 2007 年度の IATEFL 大会は 4 月 18 日から 22 日に Scotland の Aberdeen で開かれる。奮ってご参加頂けると幸いである。
(文責：村田久美子)

2 . RELC

第 4 1 回 RELC 交際セミナー参加報告 神保尚武 (早稲田大学)

第 4 1 回東南アジア地域言語センター国際セミナーに参加、発表した。
今回の全体テーマは「言語教育における教師教育」(Teacher Education in Language Teaching)であった。

大学英語教育学会の代表として、学会の教育問題研究会の4名の会員で共同発表をした。発表者は久村研、石田雅近、酒井志延、神保尚武で、題名は「日本の中等教育英語科教員養成」(Secondary School English Teacher Training in Japan)であった。30名以上の参加者があった。

JACET の代表として、東海大学の附属高校の英語プログラムに関する発表もあった。発表者は鈴木広子、Peter Collins で、題名は The Teacher Development in English Program: Improving Language Teachers' Own Learning であった。同じく30名以上の参加者があった。

多くの基調講演や研究発表に参加し、最新の情報を獲得することができた。報告者の参加した主な講演や発表に触れてみたい。

初日の基調講演は Thomas S C Farrell (Brock University, Canada)の The Art of Burglary and Learning to Teach: The Role of Language Teacher Education に参加した。新任の英語教師の最初の数年間の困難点について焦点があてられた。対処の仕方として現場教師の体験を擬似的に追体験させることの重要性が指摘された。

次の基調講演は Amy Tsui (The University of Hong Kong)の Confucianism and “Confusionism”: Negotiating EFL Teacher Identity に参加した。中国における英語教師の主体性の確立の問題であった。儒教的学習理論に根ざした伝統的 EFL 教授法で育った教師が、模範的 CLT 教師になろうと苦闘する姿が報告され、その問題点が指摘された。

Richard Smith(University of Warwick)の Valuing Tradition in a Context Approach to Teacher Education は注目される発表であった。日本を中心としたアジアでの教員養成にかかわった経験から、それぞれの国の伝統を考慮に入れたプログラムを組むことの重要性が指摘された。

2日目の基調講演は Jeremy Harmer の Motivating the Unmotivated? What Trainees Need to Know に参加した。動機付けに関して実習生が基本的に押さえておくべき知識と方法が示された。

3日目の基調講演は Peter Martin(University of East London)の Language Teacher Training: Sociolinguistic and Multilingual Realities に参加した。グローバル化した英語と多言語使用の現実に適応した語学教員養成が主題であった。

多くの地域の学者や教員と交流し、今後の共同研究の可能性を探った。

A brief report on the 41st RELC International Seminar

April 24 – 26, 2006

Suzuki Hiroko and PJ Collins

RIED, Tokai University

Attending the 41st RELC International Seminar on April 24 – 26, 2006 was a valuable opportunity in terms of both professional development and network-building. As coordinators and instructors in the Research Institute of Educational Development (RIED) Teacher Development in English (TDE) Program, we found the theme of the 2006 Seminar: “Teacher Education in Language Teaching” particularly worthwhile and interesting.

Highlights included lectures by invited speakers, including Anne Burns’

“Developing as a Teacher: A Personal and Professional Journey,” and Peter Martin’s “Language Teacher Training: Sociolinguistic and Multicultural Realities.” These and other invited speaker lectures provided a broad context in which to place our own TDE Program.

Various Parallel Paper Sessions included more concrete examples of the challenges facing both teachers and teacher trainers. One of the most meaningful sessions was Stephen J. Hall’s “In-Service or Servitude of Native Speaker Myths: Dilemmas of Internationalizing Pedagogy,” since we are now researching ALT and JTE roles and responsibilities. Rosemary Senior’s “A Socio-Pedagogic Framework for Language Teacher Education” also presented the case for integrating theory and practice in teacher development.

Other sessions outlined context-specific situations or programs, for example ministry guidelines in the Philippines or a survey conducted in New Zealand. While these were interesting, the Japan-specific sessions were naturally more applicable to our situation. The extensive survey findings by the team of Hisatake, Hisamura, Sakai and Ishida provided particularly valuable insights into perceptions of the qualities important in pre-service English teachers. Similarly, the research results presented by Nakamura Taichi explored gender differences in pre-service teacher perceptions about English language teaching.

The first of the two panel discussions was entitled, “What do language teachers need to know about language?” The panelists discussed questions the audience had submitted over the course of the conference. The main concern was the role of teaching “grammar” in light of the growing importance of communication activities. The second panel discussion was “What do language teachers need to know about teaching?” One idea which met with audience approval was that of teaching as a way to ultimately educate people already rich in originality and creativity. Other panelists expressed doubt as to whether teachers can enhance learner autonomy and provide student-centered collaborative activities.

Our session (The Teacher Development in English Program: Facilitating Teachers’ Own Learning) was in the second time block on the third day of the conference. We followed Caroline Bentley and Don Hancock, whose presentation on challenges facing Indonesian pre-service teachers provided an interesting point of reference for our own session. Around 50 people attended our session, which outlined the Japanese English educational environment, the history of RIED’s TDE programs, and the organization, contents, and impact of the current program. Although the 40 minutes did not allow much time for questions and answers, the audience was attentive and appreciative.

Overall, the conference was extremely well-organized and attracted a body of participants who were professional, focused, and dedicated to teacher development.

Audience members were unafraid to ask thoughtful questions and offer constructive feedback; at the same time, the presenters were generally very receptive to questions and comments following their sessions. The result was a positive atmosphere of mutual support.

In terms of networking, we received information about various calls for papers and upcoming conferences in Australia, Thailand, Singapore and Vietnam. We also made valuable contacts with professors, researchers, and writers working in countries around Asia and here in Japan, and are grateful for the opportunity to expand our professional connections in the field.